

徒女性の宗教活動の一端を明らかにすることを目的とする。その際、在家仏教徒女性の宗教活動の多様性を明らかにする手がかりとして、未婚女性の日常生活と仏教儀礼の関連を事例として取り上げ、非「出家」志向の女性間の、宗教活動にみられる差異に留意した考察を行う。

発表ではまず、未婚女性の世帯内部での役割分担と、宗教活動への関わり方について述べる。そして未婚女性を中心に結成され、宗教活動を行う「初転法輪組」という集団について触れ、その集団が「早乙女組」という農業労働を行うために組織された集団を中心に運営されていることを示す。次に、未婚女性を中心に組織されている早乙女組について、労働形態、雇用、運営方法等について述べ、調査村における2つの早乙女組の比較から、早乙女組が農業労働による効率的な現金収入を目的として結成された集団であることを示す。そして、前述の初転法輪組の事例に加え、ある早乙女組が行った喜捨の事例と、喜捨式という仏教儀礼への参加の様子等の事例から、農業労働を行うために組織された早乙女組が、未婚女性が集団として関わる仏教儀礼においても、重要な位置を占めており、特に早乙女組のリーダーは、自らの組のみならず、未婚女性全体の牽引役を担っていることを示す。これらから、調査村における未婚女性の世代では、早乙女組という農業労働を行うための集団が、宗教活動を行う単位となっていることを明らかにする。

最後に、初転法輪組の他に、調査村において組織されている宗教活動を行う集団の中で、主に女性が関わるものについて簡単に触れる。「斎飯供与当番」、「4地区4頭斎飯供与組」といった僧侶への食事の提供を主とする集団は、世帯単位で組織されるため、既婚女性とその活動の中心を担っており、「大雨安居持戒組」という雨安居に8戒を遵守する集団は、農業労働からも、世帯での責務からも解放された年配女性のみが、個人として参加する集団となっている。このように調査村において、未婚女性の世代を含めた女性の宗教活動は、その女性の属する社会的カテゴリーの違いに基づいて組織された集団毎に、多様な様相を呈していることから、非「出家」志向の在家仏教徒女性の宗教活動を考察する上では、個人の宗教活動だけではなく、集団としての活動にも着目する必要があるといえる。

## タイ産高級米ジャスミン・ライスの生産と輸出—東北タイから世界市場へ—

宮田敏之（天理大学）

タイ国は、2001年以降、年間700万トンを超える米の輸出を記録し、世界一の米輸出国としての地位を確かなものになっている。しかしながら、タイの米輸出の特徴は、単に世界最大の米輸出国であるという点だけではなく、世界市場において、インド産のバスマティ・ライス（Basmati Rice）と並び称される高級米ジャスミン・ライス（Jasmine Rice：タイ語 Khao Hom Mali）の生産地と輸出地であるという点にある。

このジャスミン・ライスの特徴は、以下の4点に整理できると考える。

（1）高価格：独特の香りと風味をもつため、香港やシンガポールなどのアジア市場はもとより、アメリカ合衆国や欧州においてもジャスミン・ライスの需要は大きく、2001年でみると約130万トンが輸出されている。この輸出量は、タイの米輸出全体の20パーセント弱ではあるが、その年平均輸出価格（トン当たり）は2001年が360アメリカドルで、普通白米の輸出価格188ドルの2倍に相当する高値であり、2003年にはジャスミン・ライスが506ドル、後者が203ドルとなっている。

（2）ジャスミン・ライスの品種：ジャスミン・ライスとしてタイ国内外で流通している米の大部分は、「カーオ・ドーク・マリ105（Khao Dok Mali 105：このKhaoは白いの意味）」という品種である。この稲は、1950年代以降、アメリカ政府のミッションとしてタイに赴いたコーネル大学の農学者ハリー・H・ラブ（Dr. Harris H. Love）教授とタイ国農業省（当時）がおこなった在来種の収集調査の中で、タイ中央部のチャチュンサオ県のバーンクラ郡において採取された香りの良い在来種の中から選抜されたものである。

（3）東北タイ：このカーオ・ドーク・マリ105という米の生産は、タイを代表する穀倉地帯であるチャオプラヤ川流域ではなく、比較的降水量の少ない、なだらかな高原地域の東北タイ（イーサーン地方）を中心とする。塩分を含み、砂地のような、東北タイの乾燥する大地で栽培する方が、より芳醇な香りを発するからだといわれている。

（4）新たな香り米の開発：カーオ・ドーク・マリ105以外の香りの良い米の生産を目指して、農業・協同組合省農業研究局（Krom

Witchakan Kaset) は 1980 年代以降、品種改良実験をおこなってきた。その主たる目的は、東北タイ以外の中部タイや北タイでも栽培可能で、しかも乾季作も可能な、新たな香り米の開発であった。その結果、ホームスパンブリー (Hom Suphanburi)、クローンルアン 1 (Khlóng Luang1)、パトゥムタニー 1 (Pathumuthani 1) という品種が開発され、香り米として、つまり、ジャスミン・ライスとして国内外で流通している。中でも、2000 年から栽培奨励がおこなわれているパトゥムタニー 1 という品種は、香り自体はカーオ・ドーク・マリ 105 よりも劣るとされているが、収量はカーオ・ドーク・マリ 105 の 2 倍近くに達し、中部タイにおける乾季作も可能なため、近年その生産は急速に拡大している。

本発表では、まず、カーオ・ドーク・マリ 105 が、どのように、在来種として収集され、栽培実験を経て東北タイに生産が広がり、海外市場に紹介されたのか? を整理し、高級米ジャスミン・ライスの生産・輸出の拡大過程を検証する。戦前期においては、民間の華僑系ライスビジネス・セクターを中心に米の輸出経済は発展したが、戦後の米輸出経済の成長には、ジャスミン・ライスに見られるように農業省や商業省など政府諸機関が相当程度の重要な役割を果たした点を強調したい。

また、高級米として評価されるがゆえに精米や流通段階で頻発した低級米の混入によるジャスミン・ライスの品質劣化問題、および、この問題に対するタイ政府とタイ米輸出協会などの対応について分析し、ジャスミン・ライスの生産と輸出拡大に立ちはだかる難問をどのように解決しようとしてきたかを検討する。

しかしながら、近年、農業研究局の下で改良が進められ、中部タイや北部タイで栽培可能となった香り米、つまりパトゥムタニー 1 の生産が拡大する中で、新たな問題の発生も指摘されている。つまり、この高収量かつ二期作可能な米がジャスミン・ライスとして国内外市場に大量に出回り、急激な供給増大による価格低落とカーオ・ドーク・マリ 105 への違法な混入による品質の低下をもたらすのではないかという懸念である。本発表では、この点にも言及し、ジャスミン・ライスをめぐる今後の課題についても言及したい。

## アンコール水利都市説批判

福井捷朗 (立命館アジア太平洋大学)

アンコールのバライ灌漑という通説に対しては、1980 年代以降、多少とも疑義をもつ者が増加した。1980 年のファン・リエレの論文の影響が大きいと思われる。すなわち彼は、水の取り出し・分配装置が存在していないことを指摘した。取り出し装置の欠如に関しては、C. Pottier の反論がある。すなわち、「未発見は、不存在の証明にはならない」と。しかし、ビルマやスリランカのドライゾーン、日本、中国、韓国の例からみて、大規模溜池からの取り出し装置はかなり大規模で、もしバライにも存在していれば、未発見の可能性は小さい、と発表者は考える。1934-35 年に西バライの土堤を一部削って水を取り出す実験が行われたが、水位の下降に伴って掘り下げを繰り返し、翌年には埋め戻さねばならず、実用的とは思われない。また Pottier は、西バライ下流側の水路と水田区画がアンコール時代の灌漑網を示すとしているが、東南アジアにおける低地水制御一般と基本的に変わるところがないので、必ずしも灌漑を示唆はしないと、発表者は考える。水の取り入れ方法も謎に包まれている。取り入れ口に関しても、なんらの構造物の痕跡を見ることができない。Dumarcay は、遠く離れた川から分枝した水路を高い土堤の上に走らせたとしているが、物証はない。バライ灌漑説に対して Acker は、その地理的位置からしてそもそも灌漑を目的としていたとは思われないとしている。バライは河川を堰き止める位置ではなく、通常の溜池の位置とはまったく異なる。

バライが灌漑用ではなかったとしたら、いかなる稲作が当時のアンコールの人口を養ったのか? 周達観が述べる減水期稲については、その低生産性から余剰米を生産しえなかったと Groslier は考えたが、Fox らの最近の研究では、十分都市人口を養えるとしている。現在のシムレアプ周辺の水田は、けっして天水田ではなく、タムノップと呼ばれる土堰溢流灌漑によっている。この地の年平均降水量は 1,440 mm であり、小規模な補助灌漑でも相当の生産性を達成することは可能である。

バライからの蒸発量は、おそらく降水量を多少上回る程度と思われる。であるならば、その目的が水の貯留そのものにあって、水の消費ではない場合、バライの常時貯留は比較的少量の水の補給で達成可能と思われる。アンコール都